

地域ににぎわいをもたらすスポーツ合宿 ～アフターコロナを見据えて～



こいずみ としひろ
小泉 俊博
こもろ
小諸市長(長野県)



やました たかふみ
山下 貴史
ふしかがわ
深川市長(北海道)



いずみ まちひこ
泉 理彦
なると
鳴門市市長(徳島県)



たかむら けんじ
高村 謙二
すその
裾野市長(静岡県)

司会・コーディネーター

かわい たかよし
河井 孝仁

東海大学文化社会学部広報メディア学科教授

地域ににぎわいをもたらす資源として、注目を浴びているスポーツ。特に、市内のスポーツ施設、宿泊施設などを有効活用し、交流人口の増加、地域経済の活性化につながるスポーツ合宿の誘致に取り組む自治体は増えていきます。コロナ禍で大きな影響を受けたケースも少なくありませんが、感染対策を徹底しながら、助成の拡充など合宿利用の促進策を進める自治体も出てきています。

WEB会議形式の今回の座談会では、積極的に合宿の誘致、受け入れを行う山下・深川市長、小泉・小諸市長、高村・裾野市長、泉・鳴門市長にご参加いただき、合宿誘致に向けた取り組みの概要、効率的な施設整備の方法、アフターコロナを見据えた今後の目標などについて幅広くお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)



山下 貴史
深川市長(北海道)

豊富な施設を活用し、
陸上種目以外のスポーツ合宿や、
各種文化合宿の誘致にも
積極的に取り組んでいます。

合宿誘致で目指す地域振興

河井 近年、地域の気候条件やトレーニング環境を生かして、スポーツ合宿の誘致に力を入れる自治体が増えていきます。それでは、スポーツ合宿に関する、各都市の取り組みについてお話しただきたいと思います。

山下 深川市は昭和42年、北海道内の自治体では2番目に「スポーツ都市宣言」を行って以来、スポーツの振興・発展に注力してきました。その過程で、スポーツ施設の整備も進めてきました。平成7年、ナイター設備を備えた陸上競技場の完成を機に、地域振興に向けてこの施設を最大限に活用しようと、市の主要施策として、陸上長距離種目を中心とする合宿誘致を始めました。

当初はなかなか成果が生まれませんでしたが、職員が積極的に先進地域を訪れ、「わがまちに不足している施設は何か」を懸命にリサーチし、その結果を踏まえて、市内を走るロードコースの設定、温水プールをはじめとした各種トレーニング施設の整備に力を尽くしました。

今、そうした努力が着実に実を結びつつあります。令和元年夏季に深川市が受け入れた宿泊チームの数は167チーム、宿泊者数は延べ5244人。平成29年の数値(69チーム、1648人)と比較しても、チーム数、宿泊者数とも大幅に数を増やしています。確かに、新型コロナウイルスの影響を強く受けた昨年は前年比77%減という結果に見舞われましたが、こうしたイレギュラーな事態を除けば、順調に成果を上げています。

小泉 小諸市は、国内屈指の高地トレーニングができるまちです。首都圏との交通アクセスの良さ、日本一の晴天率の高さなどの各種条件も生かしながら、浅間山周辺に広がる標高2000mの高峰高原を中心とするフィールドを「小諸市高地トレーニングエリア」と位置付け、平成29年から本格的に合宿受け入れを進めています。

合宿誘致に関しては、官民8団体で「小諸市エリア高地トレーニング推進協議会」を組織。共通のシンボルマークやキャラクターを制作し、協議会全体でPR活動を進めている一方、それぞれの団体が強みを生かしながら、独自にアスリート支援も行っています。特に、大きな強みとなっているのが充実した医療サポート体制です。協議会を構成する「浅間南麓こもろ医療センター」がアスリートの血液検査を含め、医療サポートを全面的に担当していることに加え、高地トレーニングの効果を科学的に検証するため、東海大学スポーツ医科学研究所とも連携しています。

おかげさまで平成30年度の合宿受け入れ実績



宿泊施設「エフバシオ」内には最新のトレーニング機器も完備(深川市)

市民を含めて、地域全体で トップアスリートへの おもてなしをしようと 「こもろ高トレサポーター」制度を 設けています。



小泉 俊博
小諸市長(長野県)

は延べ約4500人と、前年度比で約3倍を記録。現在では、東海大学陸上競技部などの強豪チームをはじめ、日本のトライアスロン競技の第一人者・上田藍選手など、多くのトップアスリートも市内で合宿を行っています。今後は市民の健康長寿につながる取り組みにも発展させていきたいと考えています。

高村 裾野市は「準高地トレトレーニングができる

まち」として、平成30年から新たにスポーツ合宿の誘致、アスリート支援の取り組みを始めました。これまで重視されてこなかった地域資源に光を当て、これを原動力に、シビックプライドにつながるようなまちづくりを進めたい。そう考えていた矢先に、改めて気付かされたのが、裾野市が位置する標高の高さでした。この地理的特性をスポーツ合宿に生かそうと、静岡県協力の下、標高約1450mの水ヶ塚公園にウッドチップを敷いたクロスカントリーコースを新設するなど、トレーニング環境を整備。市のスポーツ協会、観光協会、商工会などと「裾野市スポーツツーリズム推進協議会」を発足させた上で、合宿誘致を本格化させました。

誘致活動と並行して、静岡県からの委託を受けて「スポーツイノベーション推進事業」を実施。今後の合宿誘致につなげようと、静岡大学や順天堂大学などの学術機関と連携・協力の上で、準高地トレーニングがアスリートの身体にどのような効果を上げるのかを、医・科学的な見地から検証しています。

誘致を始めて以来、合宿利用者は増え続け、コロナ禍の影響を強く受けた令和2年度においても、合宿チーム数、延べ宿泊者数とも過去最高を記録しました。特に経済波及効果に至っては平成30年度の4・3倍の約4100万円と、急成長を遂げています。

泉 鳴門市では平成30年度から本格的にスポーツ大会・合宿誘致を進めています。目的は地域経済の活性化です。市の事業者数の減少、農作物の価格下落による一次産業の低迷が進む中、かつてプロ野球の日本ハムファイターズが鳴門市でキャンプを行い、大きな経済効果があった



市内道路でのトレーニング風景(小諸市)

ことも背景に、新たな成長を生み出す「産業」としてスポーツに着目するようになりました。

まず取り組んだのが庁内における組織体制の改変でした。従来は、政策ごとに教育委員会、経済局、企画総務部に分かれていた担当部署を、市長部局に新たに設置したスポーツ課に一本化。スポーツに関する政策を総合的、一体的に推進する体制に改めました。

鳴門市のスポーツ合宿は競技種目や年齢、競技レベル、受け入れチームの国籍なども一切問わず、幅広く誘致を行っているところに特徴があります。四国の玄関口で、空港からも車で20分という地理的な優位性を生かし、関西圏の大学サークルや体育会部活動にとどまらず、韓



「準高地トレーニングができるまち」として、スポーツ合宿の誘致、アスリート支援の取り組みを始めました。

高村 謙二
裾野市長 (静岡県)

国・中国の子どもたちなど、インバウンド合宿の誘致にも注力し、成果を上げてきました。

さらに、今年度(令和2年度)は新型コロナウイルスの影響で、活躍の場を失った子どもたちの思い出づくりとして、鳴門市で合宿を楽しんでもらうようと、スポーツ施設使用料減免や合宿実施にかかる助成金などの支援により、「鳴門市 de 思い出づくり合宿」事業を推進しました。

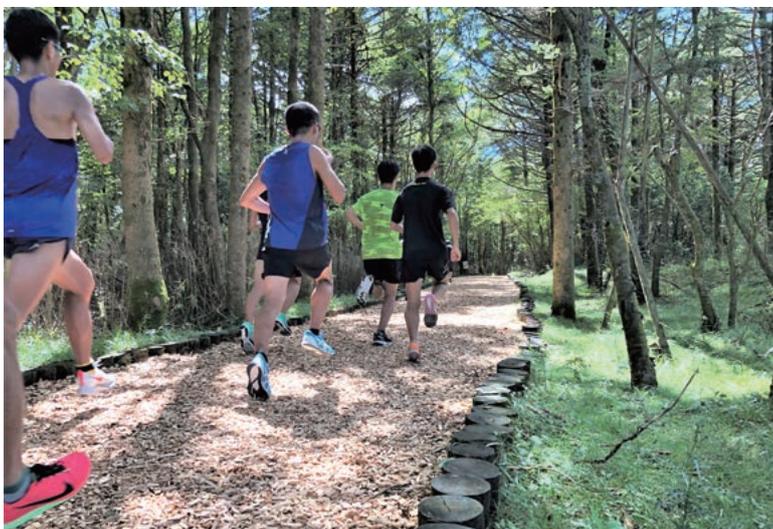
効率的な施設整備に向けて

河井 本格的に合宿誘致を行うには、アスリートの強化につながる、充実した練習環境が欠かせません。各都市では、どのように施設整備を進めていますか。

小泉 合宿誘致を始めたこの4年間を振り返っても、小諸市総合運動場内に3レーンの400m全天候型トラックを整備した以外、ハード面の施設整備は行っていません。そもそも単独の自治体で全ての施設を用意するのは困難ですから、不足している施設は周辺の地域と補完し合うことが大切だと考えています。その観点から、隣接する市などと、広域的に連携し、エリア全体で受け入れ態勢を整えています。オリンピック後には、これらの都市がタッグを組んで、ナショナルトレーニングセンターの誘致にも取り組んでいく予定で協議を始めています。

高村 全く同感です。私たちのエリアでも、静岡県東部地域局がコーディネートする形で、富士宮市、富士市、御殿場市、小山町と「富士山麓準高地トレーニング推進会議」を形成し、連携を深めています。同会議の自治体同士でスポーツ施設を互いに共有するだけでなく、本格的な準高地トレーニングは裾野市で、平地でのランニングは海岸部のロードコースがある沼津市さんで、という形で周辺の自治体とトレーニング環境も融通しています。経済効果もうまく分かち合いながら、エリア全体の活性化につなげたいですね。

山下 深川市では、閉校した中学校を改修する形で、スポーツ合宿にも利用できる宿泊施設「エフパシオ」を平成30年に開設しました。学校



ウッドチップを敷いたクロスカントリーコースでランニングするアスリート(裾野市)

統合により、中学校としての役割は終わったものの、建物はまだ十分に活用できることから、国の地方創生関連の交付金を用いて、リニューアルを行いました。最新トレーニング機器の完備に加え、食事もおいしいと利用者からも大変好評です。市内の施設においても、活用できるものは活用していく、という視点が重要になってくると思います。

泉 鳴門市には自前のスポーツ施設はほとんどありません。おおむね県の施設を活用しています。その点、充実したトレーニング環境を十分に用意できているわけではありませんが、不足している部分は、ソフト面で補いたいと考えています。実際、鳴門市は四国八十八箇所一番札

スポーツを新たな成長を 生み出す「産業」と捉え、 スポーツを軸にした 地域経済の活性化に 取り組んでいます。



泉 理彦
鳴門市長(徳島県)

所、二番札所のある地域。1300年続いてきたお遍路さんに対するおもてなしの伝統を、スポーツ合宿にも生かしたいと考えています。

「おもてなし」で誘致を促進

河井 今、泉市長から「おもてなし」についてお話がありました。これも誘致を進めるために必要な要素だと思いますが、いかがでしょうか。

山下 深川市が合宿誘致を進める上で、何よりも大切にしているのはチームとの「つながり」で

す。合宿で訪れたチームスタッフとは直接、面談させていただき、チームの要望を十分に把握した上で、的確にサービスを行うようにしています。これが深川市におけるおもてなしです。

今、私たちが心配しているのは、コロナ禍が収束した後も、スポーツ合宿の取りやめなど、見直しを図るチームが出てくるのではないかと、これまで以上に、利用いただいていた各チームとはつながりを確保し、ニーズに添えていく姿勢を示していくことが大切だと考えています。

小泉 小諸市では、市民を含めて、地域全体でトップアスリートへのおもてなしをしようという「こもろ高トレサポーター」制度を設けています。オリンピックのメダルの色に見立てて、「資金」面のサポートを行った人は「ゴールドサポーター」、地元の野菜の提供など、「物資」のサポートを行った人は「シルバーサポーター」、アスリートが走る林道脇の草刈りボランティアなど、「労力」で支援する人は「ブロンズサポーター」と位置付けるなど、市民が多様な形でアスリート支援を行う仕組みを取り入れました。このような地域を挙げたおもてなしは全国的にも珍しいようで、アスリートの皆さんも非常に喜んでくれています。リピート率も高く、中には現役を退いた後も、コーチとしてチームを引き連れて、小諸市で引き続き合宿を行う方もいらっしゃるようです。

高村 アスリートと地域住民との交流は非常に重要ですね。裾野市でも十分なおもてなしを意識して、受け入れ態勢を充実させていますが、一方で、アスリートやオリンピックを講師に招き、ランニング教室や陸上教室を行うなど、子



「鳴門de思い出づくり合宿」に参加した子どもたち(鳴門市)

どもたちとの交流促進も図っています。さらに、アスリートに限らず、市民ランナーを含めた誘客に向けて、SNSやアプリなどを用いて、「準高地トレトレーニングができるまち」を全国に情報発信しています。

泉 鳴門市は、歴史と文化が根付いた観光のまち。ペーターヴェン「第九」のアジア初演の地でもあり、うずしおなどの観光資源も豊富です。ぜひスポーツを切り口にしたおもてなしを実践しながら、観光振興を含めて、地域活性化を図りたいですね。その一環として、鳴門市ではスポーツ合宿の利用者に、市内の観光施設などでさまざまな特典が受けられる「NARUTOスポーツパス」を配布する取り組みを始め



河井 孝仁
東海大学文化社会学部広報メディア学科教授

ました。

また、鳴門市の伝統産業「足袋製造業」は日本の三大産地の一つで、全国的に高いシェアを誇っています。この足袋は、歩くときに足の指でしっかりと地面をつかむことから、足指の筋肉・体幹強化をはじめさまざまな健康効果が期待されています。そこで、鳴門市では、足袋製造業の販路拡大などを目的に、「スポーツ足袋」を開発し、自宅でできる新たなトレーニングを全国に発信していきたいと考えています。

山下 確かにスポーツ合宿が盛んになると、飲食店や宿泊施設など、他産業においても経済効果が大きいですね。まちの中になじみの飲食店ができて、毎回のよう利用されるチーム関係者もいらつしやいますよ。市にも「前回、利用した宿泊施設は食事がおいしかったので、今回もまた利用したい。予約をお願いします」といった連絡をいただくこともあります。

アフターコロナを見据えて

河井 最後に、アフターコロナを見据えてどのような取り組みを進めていらつしやるのか、今後の展望も含めてお聞かせください。

泉 新型コロナウイルスの影響は今後も続くでしょう。そうであるならば、「安心安全」なスポーツ合宿の提供は、受け入れ地域が利用者実践できる最大のおもてなしでもあると思います。

その一環として、今年の2月には、感染症を専門とする医師の指導の下、感染症対策を徹底した上で、競技者のパフォーマンスを高める「モニタースポーツ合宿」を実施しました。今回は硬式野球チームの合宿を受け入れましたが、鳴門市ではスポーツを新たな成長産業として定着させるためにも、マルチスポーツの推進を目指しています。今後は、野球に限らず、競技種目別の感染症対策もしっかりと整えていきたいと思っています。

高村 裾野市スポーツツーリズム推進協議会では、「すその頂飯プロジェクト」として、日本大学短期大学部食物栄養学科と共同でアスリート向けの献立を開発しました。食事を楽しみながら、必要な栄養も得られる、アスリートの満足度向上を目指したプロジェクトです。コロナ禍であっても、今できることをしっかり行う。アフターコロナに向けて、この姿勢が何よりも大切だと考えています。

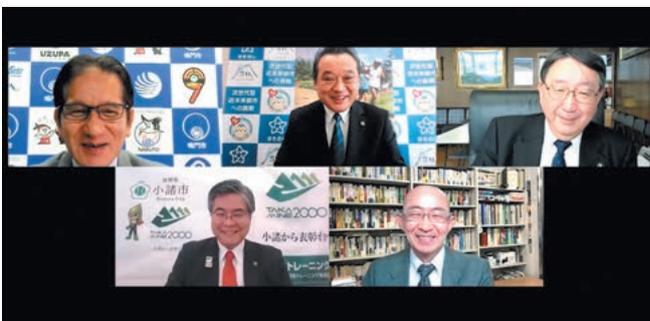
山下 スポーツは地域経済の活性化にとどまらず、まちの雰囲気盛り上げる効果もありますよね。昨年、深川市で開催された「ホクレンディスタンスチャレンジ2020深川大会」は無観客でしたが、日本新記録が出た際には、まち全体が活気にあふれました。

深川市は冬は雪深い地域のため、スポーツ合宿は夏季が中心です。通年で合宿者をお迎えできるように、今後は、プラスバンド部の練習な

ど、スポーツ以外の「文化合宿」の誘致にも積極的に取り組んでいきます。

小泉 小諸市も裾野市と同様に、トップアスリートに限らず、将来的には市民ランナーの誘致も進めて、地域振興を図りたいと考えています。市内には、疲労回復効果が期待できる温泉施設なども豊富にありますから、これらの資源を効果的にPRしながら、交流人口、関係人口の創出に取り組みたいです。

河井 多様な視点で、スポーツ合宿について議論いただきました。お話を聞きまして、スポーツ合宿とは地域の魅力や特性を改めてまちの人たちに再認識させ、地域を挙げて活性化を進めるための、効果的な「仕掛け」の一つでもあると思います。同時に、合宿を通じて、アスリートと地域が多様な形で関わり、顔の見える関係をつくっていくという



意味で、関係人口の創出にも効果があることが分かりました。今後、地域内外のさまざまな主体と連携し、スポーツ合宿を通じた地域活性化を実現していきたいと思っております。本日はありがとうございました。

(令和3年3月25日、WEB会議形式にて開催)
本コーナーは隔月掲載となります。次回は7月号に掲載予定です。